

浄土

monthly
JODO
1996・11



1996 11 November

法然上人讃仰会・発行



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) (受付時間) 9:00~23:00 (年中無休) (インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

連載
名刹を訪ねる

撮影・小堀祐二

諸宗山回向院

回向院



回向院山門と千体仏を祀る本堂・阿彌陀如来

水子供養の碑



三界万霊の石碑



帆掛け船の形をした石碑



珍しい六地藏の石碑



力家は歴代相模年寄の慰霊碑



海の男たちの供養碑



関東大震災の慰霊碑



さまざまな動物のための供養碑



山宗諸
院向回

竹本義太夫の墓所



塩地蔵



欠けているがこれが猫塚



愛大供養の碑



別院にある一光三尊阿彌陀如来



家畜供養塔



一言観音（別院）は回向院で居開帳された



ねずみ小僧次郎吉の墓





回向院本多義敬住職
両国幼稚園の土のグランドで

千葉ニュータウンにある原山幼稚園



回向院隣のスポーツクラブで親子一緒に土曜教室



原山幼稚園のホール。
阿弥陀如来が子どもたちを見守っている

浄土



1996/11月号 目次

カラーグラビア 連載〈名刹を訪ねる〉…写真=小堀祐二	
法然上人と私	尾崎安雄 8
表紙は語る 野草・花ごよみ	石井敏之 15
名刹を訪ねる 諸宗山回向院	真山 剛 16
御法語に聴く	24
コラム	29
仏教相談	大室了皓 30
うまい野菜と料理の話	我田 大 34
コラム	41
続・午後の日差しの中で	吉川英明 42
コラム	49
一分間で得られる智恵	服部順空 50
俳句の「俳」	大畑 等 58
Jフォーラム	63
事務局便り	69
編集後記	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下

表紙撮影=石井敏之

アートディレクション=近藤十四郎

法然上人と私

尾崎安雄

私が初めて法然上人に心を引かれたのは、二十四歳の時である。戦中・戦後の年代でも二十前後の若者は思考的模索をする年頃である。遅まきながら、私も色々な疑問や悩みをもち、本をあれこれあさったものである。その時ふと倉田百三の「愛と認識との出発」を手にし、続いて「出家とその弟子」を読んだ。この戯曲の主題は親鸞とその弟子唯円との話である。その中に点々と「法然聖人」の文字が出てくる。親鸞は法然の弟子であることが知った。私の癖ですぐに歴史的背景を調べた。法然と弟子親鸞との間は四十一年の開きがあり、親鸞とその弟子唯円との間は四十九年の開きがある。この似たような年齢の間隔にある師と弟子の関係を見ると、共に我が子のように、いや、孫のような感覚でいとおしく思っていて見ておられたのであろう。唯、師となる二人を比較すると、法然上人は妻も子もない清僧であり、親鸞聖人は玉日・恵信尼という二人の妻をもち、善鸞という跡継ぎもいて、自ら僧にあらず、俗人でもない（非僧非俗）愚禿親鸞と名乗ったことである。

法然上人が立宗を決意された背景を見ると、仏教が西暦五五二年にインドから中国・韓国を経て、また、その五十年後に遣隋使、八十年後には遣唐使を通じて中国より直接日本に入ってきた。その仏教が奈良時代、南都六宗と栄えたのである。しかし後年には、これが腐敗政治のもとだと考えられた桓武天皇は都を長岡京・平宮京（京都）と移され、伝教大師最澄を庇護し天台宗が新しく生れた。そしてそのすぐ後、嵯峨天皇の庇護のもと弘法大師空海が開いた真言宗が現われ、平安二大仏教時代となる。しかし、この二大仏教も宗

祖が亡くなり年を重ねてくると、多数の僧をかゝえ、伽藍の数の上からも巨大化していき
一一〇〇年頃には教団内部の争いが始まる。特に比叡山天台宗では一二〇年頃から僧が
武器を持ち、暴力や武力で争うようになった。一方で武士が台頭し、両者の権力争いとな
り、また、公家政治争いの道具に使われ、ついには保元・平治の乱が起った。都は灰と
化し、一番被害を受けたのは一般民衆である。戦災にあい、一方では盗賊があばれ廻る。
天災で食糧は得られず餓死するもの道にあふれる始末であつたという。これら弱き民衆の
為の仏教を起したのが鎌倉仏教の先覚者法然上人である。

法然上人は比叡山で行を勤め智慧の法然房と将来を嘱望された師であるが、教団の現状
をなげき、西塔の青龍寺に十八才で隠遁され報恩蔵にて五千卷を越える経文や論書を五遍
も繰返し読まれた。そして中国の善導大師が観無量寿経を解釈した「観経疏」に目をとめ
られ、凡夫が救われるのはこれだと悟られた。勿論、既成仏教の厳しい弾圧があることを
覚悟で、叡山を降り、念仏弘通にふみきられたのである。法然上人が陰に陽に勢力を固持
する既成教団の中で、称名念仏を弘めようとの決断をなされたことは、私のような無力な
ものにとつてすばらしいことに思えたのである。

このように、私が法然上人に関心をもったのは、こゝ無量山安樂寺に入山する四年前の
ことである。

まことに奇しき因縁で在家から入山した私は、宗門教師養成講座・加行と四年間芝の増

上寺に通い住職に就いた。もともと高校教員の赴任先としてこの奥出雲の地に來た私である。檀家の強い要請により入山したが、教員と住職の両立はできるものではなかった。精神的に悩み、時間的に苦しみながら二十四年続けた教員の停年迄、二年を残して早く退職し、それからがむしやらに仏典・論書を読んだ。また、法然上人の旧蹟を歩きたいと思い、先住が買い求めておかれた、大正十二年印刷の門上人全集刊行会発行の「勅集御伝絵図辨釈」を一頁一頁コピーして切り張りし、更に関連文献もコピー張り加え、スクラップブックを作った。岡山久米南町誕生寺から奈義山菩提寺と始まり、叡山登領と続き、三十六ヶ寺にまとめた。地図により距離を積算し計画日程を立てた。なにぶんにも教員退職後、寺に参集できる檀家の人に毎月二回、写経・念仏・法語一話・詠唱と三時間分の準備が必要なので三十六ヶ寺一度に廻ることができない。三度に分けて廻った。この旅で法然上人の御心を偲び感動に涙したところが三ヶ寺ある。

こうして宗学を学び、法然上人を偲ぶ旅をするにあらためて上人の偉大さ、御心の広さを感じたのである。特に比叡山延暦寺大講堂にて、釈尊、その十大弟子、また、中国・日本の高僧絵伝の肖像画を見て歩き法然上人の容姿に接したとき、その慈愛深きお顔、正に三昧発得の師であると思った。三昧発得とは心を一境に集中させ散乱することなく、仏の勝れた境地を了知し、その極楽境地に身を合体された姿をいう。このような祖師追慕の旅を文章にしたのが私の自費出版「古寺名刹への道」第一部である。それから後、選択集(選

撰本願念仏集」を二度読み返した。

私が選択集の中で注目した点は、初めの方で祖師が立教開宗の爲の所依の經典・論書を明示され、男女貴賤の区別なく一切衆生を平等に往生せしめるために阿弥陀仏は難行を捨て易行をもつて本願とされたと言われた。そしてこゝに富めるものは少なく、貧しきもの多し……からはじまる凡夫往生の道をあげられた。このことは、勝林院での大原問答のとき上人が述べられた言葉そのものであると思った。次に称名念仏の利益を説かれ、念仏する我々の心のありかたを述べられている。これは、上人が遷化される二日前に残された一枚起請文で明快に示されている。終の方では、「偏依善導一師」の理を縷々述べられていて、こゝに三昧發得の証しを挙げられた。そして最後に釈尊の称名念仏についての發遣の義を示され、六方の諸仏が念仏往生を証明されていることを取りあげられている。

この選択集は月輪禪閣の要請によって筆をとられたものであるというが、宗門にとってはすばらしき教判なのである。しかるに何故一番終りの二、三行のところに、次のような文があるのか、「一度目を通された後は、壁の底に埋め、窓の前（人目にふれる所）に置かないでほしい。恐れることは、これにて法を破り悪しき道にふみ込んでもらつては困るからである」と書かれている。これは念仏門の真意を解せぬ弟子達の誤解をおそれのことであるが、一方この書によって弟子達が法難にあふことのないよう心配されていることだと思ふ。これが開宗当初から多くの弟子を抱え、なんの庇護もない祖師の一番気にしておら

れたことだと私は思った。

一二〇四年法然上人が七十二歳の時、比叡山の僧衆が専修念仏停止の強訴をしようとした。そのとき祖師は七箇条制戒をまとめ百九十人に余る弟子達に署名させ、叡山の座主に提示して危機をさけられた。また、一二〇五年に奈良興福寺衆徒の念仏禁断の訴状に対しても登山状をしたためられ、これに対処しようとなされたと思う。いづれにしても門徒の曲解を戒められ、念仏者の反省を求められるのみにて、法敵をもとめてこれを責める論争は決して示されなかった。これが祖師の外部への対応の仕方であった。大原問答のときもそうである。私は祖師の法語集も噛みしめるように読んだ。一方、多くの宗教評論家の親鸞聖人に対しての論評や、唯円の歎異抄も読んだ。この歎異抄の中の「善人なほもて往生をとぐいはんや悪人をや」、いわゆる悪人正機説である。これを見たとき、若き頃、西洋哲学を齧った私はすぐに、この言葉は、逆さまない、まわして本来の意味を強めるもの（パラドックス＝逆説法）であると読んだのである。

私はこのことよりも、多くの評論家がとりあげている、絶対他力にとらわれた。親鸞聖人は念仏門に入って自ら妻帯宣言をした。しかし、これも念仏門に目覚め、法然上人の庇護のもとで実践活動に入られたのである。越後に流罪となるや、田野の人となり、二人目の妻恵信尼を迎え、玉日の子一人と恵信尼の子六人、合せて七人の子をもうけている。そして六十の坂を越え京に一人帰ってから、我が子善鸞の背反にあい義絶さざるを得ない情

況に負い込まれた。これらのことを見ると、今日一般家庭の中にも見られる現象を身を持って体験され、普通の親と同じ苦悩の日を送られているのである。

このことを考えると、親鸞聖人は、凡夫往生の凡夫に徹しようと自力行を続けて生き、終焉の近づく晩年になって「自然法爾」の境地に到達されたのではなからうか。現代の社会で、自力行を完全に捨て絶対他力に生きている人がどれ程おられるのか、凡夫であるからこそ自力が捨てられず五欲に迷っているのではなからうか、ましてや、どなたかがいわれる宗教音痴の多い日本人、ともすれば自己を失い五欲に走る人々である。私も然り、いまだに迷いの人生である。だからこそ、法然上人は申された。迷いながらも念仏を申しなさい、と。この言葉にはげまされ、宇宙の真理を大悟された仏の力をかりて安心の境地に到達させて頂くのである。

最後にもう一話、私の提案で、辻説法を実施するならと引き受けた町仏教会の世話を一期分四年続けた。毎月一回、ショッピングセンターの二階広場を借りての説法である。

ある日の当番、曹洞宗の和尚（良寛研究者）が一つの和歌を取りあげて話をされた。禅によって清純な童心を持ち続けられたといわれている良寛禅師の歌である。

心もよ　ことばも遠く　とどかねば

果しなくみ名を　となえこそすれ

漢文になる、多くの禅語録を残され、聖道門（自力行）によって往生の道を得られたと思われる禅師が、このような歌を残されている。

表紙は語る

野草花ごよみ

11月

・
センブリ

(リンドウ科)

山の日当たりのよい場所にはえる。ただしこの写真の場合は、日当たりの悪い場所にはえており、原版では、花のポイントである紫色のすじが写っているが、印刷で出るだろうかと心配である。名は、胃の民間薬として昔から使った、非常に苦く、千回振り出して苦いと言われることによる。

撮影場所 東京都 高尾山

もうひと花

キチジョウソウ (ユリ科)

吉祥草。緑の竹のようなふしのある根を地表にはわせ、所々に根と葉を出し増殖するので、必ず群生する。花は内側が淡い赤紫、外側は濃い赤紫であるが、写真では色反射のため内側の色がはっきりとしない。花の後の赤紫色の果実も美しい。

撮影場所 神奈川県大磯町高麗山



表紙Photo/Report
石井敏之

連載

名刹を訪ねる

真山剛

諸宗山回向院

院回向



回向院山門は京葉道路に面している

さて、何から書き出そうか？

この連載も読者と編集部の励ましのお陰で、半年が過ぎた。今回のお寺は東京・両国にある回向院。七つ目のお寺になる。

さあ書こう、と机に向かつてはたと困った。紹介したい事柄がとても多い。しかもそのどれもがとても面白く、甲乙つけがたいのだ。昔の大川、今の隅田川をわたつてすぐに位置する回向院はその名を諸宗山無縁寺回向院という。

大川といえは時代小説にはなくてはならない川。料理屋や茶店、船宿が左右に並び、その奥には色街が控える花のお江戸の中心である。中でも華やかな本所、深川。その本所にあり大川を渡った正面に山門を構える回向院は、まさに繁華街の中心に位置していた。この地に回向院が建立されたのが明暦三年、一六五七年というから江戸時代の初期である。

この明暦三年の正月十八、十九日に大火事が江戸を襲った。「振袖火事」と呼ばれるこの火事で市街の六割以上が焼土と化し、十万人以上の江戸庶民が亡くなった。さらに同月二十一日には大雪烈風が襲い、その被害はさらに拡大した。この相次ぐ惨事で亡くなった庶民の大半は身元がわからない。そこで江戸幕府はその無縁の庶民の亡骸を手厚く葬らんと「万人塚」を建立、徳川家の菩提寺、増上寺の第二十三世遵誓上人に大法要をとり行なわせた。



場所中の両国国技館

こうして回向院の歴史は始まる。

遵誉上人は弔った霊が無縁の人であり、しかも宗旨もばらばらであつたことを配慮し、諸宗山無縁寺回向院と命名。浄土宗大本山増上寺の末寺ではありながら、色々な宗派の無縁仏の回向を行う、ちよつと変わったお寺が、江戸時代に庶民の街の真ん中に作られることになる。

江戸時代といえは徳川家の天下。地元三河の浄土宗のお寺を菩提寺としていた徳川家康が、江戸に幕府を開くとともにその菩提寺となつた増上寺は、その庇護の下、大いに権勢をふるうことになる。増上寺の特徴は浄土宗の学問所として多くの僧侶が集まつたことと、徳川家のお霊屋となつたことだ。だが、どちらも特定の人々のためのものだ。これに対し、回向院はその門戸を庶民に開いた寺である。天災でなくなつた人々を分け隔てなく弔うことがその建立の目的だから当然ではあるが、回向院はその後庶民のために色々な形で開かれていく。

平安時代に端を発し、江戸時代に盛んになつたお寺の行事に開帳という行事がある。開帳とは普段は奥にしまつてある信仰の対象となる本尊などを、一般民衆にお寺や神社が公開する行事である。つづりのごとく帳(とばり)を開くのだが、この目的は、民衆の信仰に応えるため、信仰する者を増やすため、そして堂宇などの修復基金



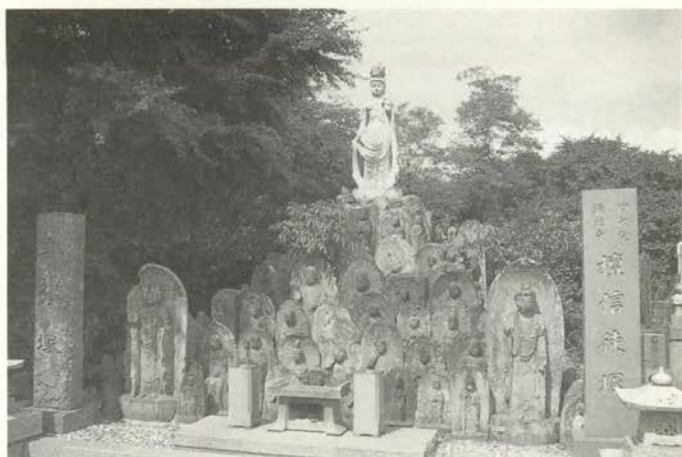
回向院別院山門

としての浄財集めのため、などである。

これらどの目的にも共通して言えることは、一人でも多くの人々に集まってもらうことである。当時の道路ともいえる大川周辺は納涼、それに今でも風物詩となっている花火、と人集めには苦勞は要らない。こういう場所に建てられた回向院は必然と開帳の場所となる。開帳には寺社奉行の許可がいるが、幕府が建立した寺ならその許可も簡単に取りやすい。かくして回向院は開帳寺としてその名を馳せる。江戸時代の開帳七百四十一件のうち、なんと百六十六件が回向院で行われている。

江戸時代の開帳といえば信濃善光寺の阿弥陀如来、京都清涼寺の釈迦如来、下総新勝寺の不動明王などが有名だが、中でも善光寺の一光三尊阿弥陀如来の人氣は高く、江戸で五回の開帳を行っている。この五回のうち最初を含め四回は回向院で行われている。現在回向院は千葉縣市川市に別院を構えるが、その別院の本尊が別名善光寺如来と呼ばれる一光三尊阿弥陀如来だ。

余談だが、今夏に法隆寺秘宝展が東京・赤坂の美術館で開かれた。展覧会のサブ・タイトルが――再現・元禄江戸開帳――なのだが、この開帳は信濃善光寺の回向院での開帳の成功を風聞し、実現したものだ。この法隆寺の回向院での開帳も大成功をおさめ、法隆寺は多額の浄財を持ち帰り、伽藍の修理を終えたのである。展覧



別院墓地の檀信徒塚

別院の二重観音堂



会には本所回向院図と回向院御開帳場図の二点も展示された。当時の回向院の伽藍の様子を今に伝える貴重なものだ。

このように出開帳の場所となる寺院のことを宿寺というが、回向院の名は江戸時代は宿寺として全国にとどろいていた。

また相撲好きな方ならご存じだろうが、旧両国国技館が完成する明治四十二年まで、なんと七十六年間も回向院で相撲が行われていたのだ。江戸時代の相撲は主として公共社会事業の資金集めのための寄付相撲、いわゆる勧進相撲で、この勧進相撲が回向院で初めて行われたのが明和五年、一七六八年のこと。こちらも多くの寄付を集めるために人出の多い回向院を選んだのであろう。

こうした出開帳や勧進相撲の他にも、回向院には庶民のための寺としての歴史が数多く残されている。

義賊・鼠小僧次郎吉、戯作者・山東京伝、人形浄瑠璃に「義太夫節」という派を開創した初世竹本義太夫、歌舞伎の二世中村勘三郎、理髪業の祖をいわれる「天下の黒一」こと奥村市藏など、江戸時代の庶民の生活に密着した名だたる人物の墓が境内にある。

もちろんこうした個人墓以外にも回向院建立の主旨を彷彿とさせる塔や墓もある。

寛文四年、一六六五年に建てられた回向院最古の石塔、三界万霊塔をはじめ、明暦大火横死者追善供養塔、安政大地震横死者供養塔、

関東大震災横死者の墓、海難供養碑、刑囚牢病死者供養塔といったまさにさまざまな宗派、そして多くの無縁の方のための供養塔が並んでいる。

また、最近では決して珍しくなくなったペットのお墓だが、ここ回向院には江戸時代からの猫塚をはじめ諸動物の供養が行われ続けている。というのも、徳川第四代將軍家綱の愛馬が死亡、上意によりその骸を開創直後の回向院に葬ることになった。回向院にはこうした動物供養の歴史があるのだ。水子塚も寛政五年、一七九三年に老中松平定信の発願にて建立されている。このように動物供養、水子供養といっても、そこそこにあるものとは少々違う。

このようにそのどれもが一つの物語りになる歴史を回向院は持っている。このほかに千体地藏尊を背にした本尊阿弥陀如来、先に述べた法隆寺展覧会の回向院図に載っている一言観音、さらに震災や空襲を免れた寺宝など、いくつもの歴史が息づいている。

「このお寺を一言でいうなら、ユニークなお寺、でしょうね」と取材の質問に開口一番微笑みながら答えてくれた本多義敬住職だが、本当に「庶民の中に位置し、ありとあらゆるものを回向してきた庶民のための寺」なのである。

しかし、ユニークなのはお寺だけではない。住職もまた個性溢れる方である。



回向院第二十四世・本多義敬住職

「まず普通の人として生活できてから坊さん」という先代の意志もあり、本多住職は普通の大学から一般企業に。その後家に入り、寺の仕事は住職が、大正十三年から続く回向院内にある両国幼稚園は当時副住職だった本多現住職が主に見るという分業性をひいていたが、本多現住職は親子の触れ合いを大切にしたいと、山梨に保育の野外活動のための山の家を建てたり、土曜日に園児の親が主体になって活動する土曜教室を開いたりしている。さらに千葉の新興住宅地に新しく幼稚園を作った。

「どうもわたしは計画的ではないのですが、仏の教えの種をばら撒けたらと思っています」と本多住職は謙遜するが、幼児教育を通して「寺はより良く生きて行くためのお手伝い」を实践されている。両国幼稚園と千葉の原山幼稚園と両方見学させてもらったが、どちらにも園長先生・本多住職の思いが随所に現れている。

本多住職が最後にこう言った。

「もちろんこのお寺は浄土宗ではあるのですが、諸宗山無縁寺回向院という名前の通り、さまざまな人たちの回向をしていくお寺だ、という事を忘れないようにしています」

江戸時代に幕府が庶民のために作ったお寺。この貴重なお寺はいつまでも庶民のためのお寺であり続けている。

(ルポライター)

御法語に聴く

誰も是を遺恨の事などゆめにも思し召すべからず候。然べき身の宿報と申し、又穢悪充滿のさかい、是に初めぬ事にて候えば、何事に付ても只急々往生をせんと思ふべき事に候。

『津戸三郎へつかはす御返事（八月二十四日付）』

誰も私が流罪になったことについて決して恨みを抱くようなことがあつてはなりません。このようになる因果をこの身に背負っていたのですし、穢れや悪にみちみちた世の中は今にはじまったわけではありませんから、何事につけても、一刻も早く往生しようと思ひになるべきです。

遺恨の向こう側

私の場合、長電話の原因はたいいてい人様への論評、文句が多い。

これでスッキリと思うのだが、電話を切ると溜息が出てしまう。

宇宙は絶えずわれらによって変化する／誰が誰よりどうか

誰の仕事がどうか／そんなことを言ってるひまがあるか

宮沢賢治の詩の一節だ。なんとも耳が痛い。が、そんなことも言ってもいられない時が、突然、訪れてしまうことがある。

法然上人のお父上、漆間時国公は今という警察官の家系に生まれたが、「いささか本性に慢ずる心」があつたそうだ。預所（年貢取立の代行所）の源内武者定明という人に「あなづりて、執務にしたがわず、面謁せざる」態度をとり、保延七年（一一四二）春、「ふかく遺恨した」定明の夜討ちに遭うところとなつてしまった。時国は瀕死の傷を負い、時に九歳の法然上人にこう遺言した。「恨んではならぬ。所詮、こうなる因果を背負つた我が身。今、また遺恨を結んだならば、その仇は、幾たび生まれ変わろうとも尽きやしない。そ

れよりも、一刻も早く出家して我が菩提を弔ってくれ」と。

時は流れて建永二年（一二〇七）。七五歳となった上人は、専修念仏の交流をよしとしない勢力の圧力により、四国へと流罪を命ぜられた。その間、上人の身を氣遣うお弟子さんから手紙をもらい返事を書いたという。その一部が冒頭の御法語である。

恨むことより、一刻も早く往生を願いなさい。どうだろう。この御法語は、お父上の御遺言とまったく同じではないか。人生に人を恨む暇などあつてはならない。父上の遺言にしたがつて出家した上人は、老境にあつてなお、出家の原点に立っていたのだ。

ところで「恨みをなくす」ことだけがこの法語の主題であろうか。しかるべき身であるから「人を恨むな」というのはわかる。しかし、「一刻も早く往生しようと思いなさい」を「この世は穢土だから」とのみ理解してしまうのは、いささか性急だ。

ある漫画の作り話だ。時代は第二次大戦末期、ある村での出来事

という設定だ。その村に敵機が不時着した。村人がパイロットを捕らえると、疎開してきた少年に「お前が仇を討て」と言い渡した。空襲で親兄弟を失い、曾祖父に引き取られていたのだ。復讐は復讐を招く。果てしない不条理の世界だ。少年は焼け死んでいく親兄弟の姿を脳裏に浮かべながらも「ボクが復讐を終わらせる。つらくても、くやしなくても、ここで終わらせなきゃいけないんだ」と手にした鎌を投げ捨てた。

ここまでは恨む気持ちを殺して耐え忍ぶ話だ。しかし少年はそこから一步を踏み出した。その曾祖父が英語に通じていた。彼は英語で友達のことを何とのかを聞き出す。そして傍らの敵兵に手を差し出しながら「フレンド、フレンド」と何度も呼び掛け、やがて敵兵も「トモダチ」と応える。その二人の眼差しは、法・ダルマが友情となって顕れたかのような、何とも言えない透明感で描かれていた。たかだか漫画だが、このラストシーンには感動した。

怨憎会苦は穢土の常。それだけに、父上の仇、定明を恨まず、さらに友情を抱いて過ごすにはどうすればよいか。法然上人とてさぞや悩んだことだろう。極楽浄土、お念仏の御教えに出会われたのも「怨憎会楽」を理想と掲げたからに違いない。誰もが救われていく浄土。遺恨さえも友情に「変化」させるのだ。恨みはなかなか消えるまい。しかし、敢えて友情を抱こうとしなければ、浄土の存在そのものが信じられなくなる。逆に、浄土の存在を信じているからこそ、恨むことがないのだ。たとえ誰が誰を流罪にしたとしても、みな俱会一処。上人の胸に遺恨は残らなかったであろう。

遺恨と云ってしまったては、やがてお浄土の実在も信じられなくなる。「急いで往生しようと思いなさい」との言葉の裏には、常に浄土への思いを相続させよ、と諭していると思うのだ。

「かれのいうことは、いつもホラばかりで信用できないヨ」とか「大ボラを吹く」などよく使われる、この「ボラ」も、やはり仏教から出た言葉です。

広辞苑にも「法螺貝の略。おあげさということ。でたらめをいうこと」と出ています。この法螺貝というのは、本来螺貝というのが正しいそうで、法螺貝といわれるようになったのは、中国でできた漢訳仏典からのようです。

螺貝は、インドでは吹奏楽器

の一つとして使われていて、今日でも南洋の原住民の間では楽器として使われています。古くは漁場での合図にこれを用いたり、人を集めるのに用いたりしました。また、インドでは戦場でこれを吹いて出撃の合図に用いたりしたようで、日本でも昔は軍陣での合図に用い、陣貝と呼んでいました。

仏教では、螺貝を吹くことを仏の説法に喩えて、中国の翻訳者は法螺と訳したのです。

一般には仏が説法することを、

法螺

ほら

てんほうりん
転法輪、すなわち教法の輪を転がすとか、獅子吼、すなわちライオンの遠吠えとかの表現をもつて喩えています。これらと同様に、大法螺を吹くというのも、仏の説法の喩えとして用いているのです。

おそらく「釈迦のようなえらぶったお説教をする」という意味がもともとの意味でしょうが、それが「大げさな言葉をいう」の意味に代わり、さらに「ウソをつく」という意味になったのでしょうか。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX〇七五―三一五―三七五三

大室了皓師が答える

読者からの仏教相談

宝暦に書かれた

運勢のままの現実

この先どうすれば……



私は、毎年、お正月に宝暦を買い、私や家族の一年の運勢を読んで、良ければ喜んだり、悪ければ、そうならないように注意をしています。

ところが、今年の娘の運勢が最悪で、それもとことく当たってきているので、不安で不安でなりません。

まず、今年のはじめに対人関係のいざこざに巻き込まれ、友人からの信頼を失いました。そして4月には結婚を考えていた男性との別離、それからノイローゼに。その影響が、5月に交通事故をおこして入院（幸い、相手には怪我がありませんでした）。その入院中に職場が倒産。再就職は今もできていません。そしてこの夏には拒食症になったり、反対にヤケ食いをしたりで胃腸疾患となり、ガリガリ

にやせはそってしまいました。

これらのことがみな宝暦に出ていて、注意するようにと書かれているのですが、どう注意をすればよいのか、この通りになってしまっているのです。今年もまだ数カ月のこっています。宝暦にはまだ泌尿器系の疾患や耳の病気に注意と書いてあります。

主人はそんなもの信じなければいい、といいますが、あまりにも当たっているのです。お寺でも行つて、御被いしてもらおうかとも考えています。

本当にこういうことはあるのでしょうか。もし、あるとしたら、どうしたらこれから身を守るでしょうか。仏神を信心すればふせげるでしょうか。お教えください。

（悩める母）

A

ある新聞の運勢によりますと、今日の私は「人身は地水火風の和合により健康。不和なれば四百四病生ず。和より汝を救う」

昨日は次のように書いてありました。

「天は公平で万物を愛育する。これ教育者の心術なり」

これによりますと、今日の私は起居動作のすべてにおいて「和」を旨として過ごしなさい。

昨日の私は誰に対しても平等の「愛」を持って接しなさい、というものだと思います。

これを要約すれば、運命は己の心がけ次第であるから、日々これを忘れないことが大切であると言っているものだと思っております。

宝暦によりますと、今年の私の運勢は、要約しますと

「万事は思いどおりに運ぶ。だが順調にいくと安心し気が弛むと、迷いや欲が出て難儀に会う。本来の仕事に手を抜こうとすると、誘

惑や甘言に乗り、災いを起こして散財の憂き目にあい、折角の幸運を失うから用心が肝要。特に下半期からは運勢は徐々に下降。苦勞もありまた難問も付きまとうが、決して油断せず試練と思い解決に全勢力を注ぐべし」
と、あります。

これも言わんとするところは、順調に運ぶ時には、気を引き締めなさい。不運に見舞われたら、試練と思い、苦の後には楽が順番を待っていると信じて、落ち込む心を奮い立たせて頑張りなさい。

と云うものだと思います。

私もその心を忘れずに、十カ月近く過ごしてきました。辛い事もありましたが、不幸な年だと思うどころか、反対に仏に守られて幸せな日々を送ることができたと感謝しています。あと二ヶ月で今年も終わりますが、その二ヶ月への不安は全くありません。

お嬢さんは、宝暦どおりに不幸が続き、ご苦勞されているとのことですね。

一つは、対人関係が思うようにならないで、友人の信頼を失ったとのことですが、笑顔には笑顔が返ってくると申します。ご本人の回りに対する態度はどうだったのでしょうか。よく反省して頂くことを願っています。

第二には、結婚まで考えていた男性と縁が切れ、ノイローゼになったとのことですが、友人からも信頼されなくなつては、男性との縁の切れるのも当然だと思います。

一と二とは別々ではなく、その原因は同じくご本人の態度によつてだと思えます。

しかし別離は悲しく辛いものです。しかも信じていた人であつたら殊の外だろうとお察し致しますが、相手の男性も同じようにお嬢さんを信じていたならば、友人の言葉などには惑わされなかったのではないのでしょうか。当人同志よりも他人の言葉を信じての愛をなくするような男性だつたら、お嬢さんの方から縁を切るべきです。

そう考えると、彼との別離は良かったので

はないでしょうか。

三つ目は、交通事故ですね。

私は先月、続けて三つの事故を起こしました。接触事故で幸いでしたが、バックやサイドミラーの確認を怠つたからです。天から降つてきたものではなく、身から出た錆なのです。

会社の倒産などは今の経済状況の中では、珍しいものではありません。悩んでいるのはお嬢さんだけではなく、同じ苦しみを持つている人が沢山おられます。気を持ち直してチヤンスを辛抱強く待っていて下さい。

病気のこともご心配のようですが、ならない今から考えたつて何の役にもなりません。明日のことは明日になって考えましょう。

宝暦にあることは、結論的に言えば、いかなる事に出合つても気を引き締めて、しかもおおらかに対処すべしと言うことです。表面などに惑わされないよう願っています。

うまい野菜と



料理の話

あるいは

セ
ツ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

今年はナスの成育が不調だった、前半は。

その大きな原因は遅く（五月初め）まで雪が残っていたからだ。当地はスキー場で有名な豪雪地の新潟の石打。そして今年は久々に雪が多かったのだ。

気温や地温が充分上がらないうちに、苗を植えたのが失敗だった。いつも苗を買っている、農協の春の苗ものの市は地温にかわりなく五月の第二日曜くらいに設定されている。

だから苗を育てている農家はその日に向けてビニールハウスで灯油でも何でも使って苗を完成させる。その暖かいところに慣れた苗をすぐに定植してしまったのがよくなかった。

雪が消えて間もない冷たい土で、根が伸びられなかったのだらうと、今思う。透明なビニールでウネをマルチして地温上昇をはかってから植えればよかった。と、後悔先に立たず。私は秋にビニールを片付けるのが嫌なので、マルチはワラとか草にしているのです。ワラ

は腐って勝手に有機質肥料になるから一石二鳥だ、とそうしているのです。が、それも今年手回しよく、早くしてしまったのも裏目に出た。日光が地面に直接当たらないから、ますます地温上昇が阻害されたようだ。（マルチには雑草を防ごうという目的もある）

結局、一本一三〇円也で買ってきたミズナス（タキイ種苗。中長ナス。皮がすごく柔らかくて、歯の不自由な年寄りには浅漬用はこれではなくてはという）が数本、ナシナス（新潟の地方品種「黒十全」のこのへんでの通称。

丸ナス。若いものの浅漬けは最高）が二本枯れてしまった。他の生き残り組も元気を出さないこと、はなはだしい。葉も黄色くなったり色褪せたりで病気っぽい。そういう葉っぱは、頭にきたので、みんな切ってすててしまった。そしてゆっくり育苗している近所の農家から、また苗を一〇本ばかりを買ってきて植えた。品種はよくわからない。おそらく自家採

種をくり返しているものだ。このナス苗は地温も上がってうまくなった。どんどん成長して先に買ったのを追い越してしまった。葉を切ったのも、七月末にはようやく元氣を出してきて天気がよければどんどん困るほどになった。光合成の、オテント様の力を実感します。

このほかに私は米（べー）ナスと泉州水ナスというのを自分で種を蒔いて作っている。近所で苗を売っていないからだ。これは、苗を買って植えたのがいかがなり疲れてきた時に、みずみずしいのがなりはじめてうれしい。胡瓜でもナスでもインゲンでもなり始めのほうが、姿・形や味がそのものらしくて、いいのがなります。これは野菜ばかりのはないでもないか。

商品用に作っている農家なら売り物にならないのが多くなってくれば、片付けてしまうでしょう。しかし自家菜園（ここらじやセツ

ツエーバタケという）ではなっている間は片付けないですとならせておきます。次に作物を植える都合でもなければ。ナスは一年一作ですから買った苗のは七月から一〇月くらいまでなっているのです。

このナスの一生に合わせて私たちもその時に出来たのを食っていくわけです。初物は当然「一番なり」です。六月末か七月初めにとれます。まだ小さい木の、最初の分枝のすぐ上の主幹から蕾が出て花が咲きやがて実になるのが一番なりです。三月末か四月初めに種を蒔いたのがここまでなるのに九〇日くらいかかります。露地で五月中旬に蒔けば、七〇日くらいで七月末に収穫になりますが、その一ト月早く、のために寒いうちからいろいろ育苗の苦勞をするのです。

初物は思いつけばホトケ様に上げて、チーンしてから味噌汁の実にしたり、胡瓜もみならぬナスモミにして食べます。今年は思いつ

いて、大きな井に醬油で色をつけた塩水を作り、そこにぶつぶつ切ったなすと、これも初物のサツキミドリやハミング（サカタ種苗）という胡瓜もブツ切りにして、氷も投げこんで食べてみました。そしたら、こんな単純な料理とも言えない料理でうまいんだからやんなっちゃった。ほとんど板前いらすの世界だ。でもそこはまた、素材がすべてを決してしまふという日本料理の極北と重なるかもしれない。そういえば作ってからアワビの水貝という料理と似ていると思った。

七月八月の食卓はもう夏野菜いろいろのオンパレードですが、いろんな料理にできるナスは中でも主役です。とかばっかりです。朝の味噌汁の実がナス。漬け物がナス漬、ナスミソとかアブラミソとかいう味噌味の炒め煮、それに昨夜の残りの柔らかくなったナスの天ぷら、とくれば言うことはありません。中でもナス漬けのうまさは、多少思い上がり

った板前の私を考え直させた恩人です。東京で板前として修行してナス漬けなんてこんなもんさ、とかんがえていたのを、見事に裏切ってくれたのです。スポンジのようなナスに重石をかけてぺっちゃんこにするのがナス漬けだ、それが板前のやり方だなどと思っていたのを。

ナス自体がちがうのだった。スポンジというよりもつと緻密なしっかりした肉質、すべっこくて柔らかい。売っているのとは名前は同じでもちがうものだった。

それを食った舌はこっちがうまいといっているのに、板前のアタマは習ったほうに固執したがるのです。漬け物は修行しませんでした、店をやってから畑も自分でやってナスをとり、一〇年くらいしてやっと失敗なくナス漬けができるようになりました。

あと畑をするようになってから、早朝にナスモギに行くと、木になっているナスがすご

秋茄子の
やうな鼻して
湯呑みの
番



イラスト・平野 穂

くきれいなものにもたまげました。もいできたのや売っているのは、さんざ扱ってききました。が、なっているのかこんななどとは知らなかった。異様な光を放っています。料理や食品の写真で、霧吹きかけたり、照明のかげんや印刷のかげんで、いかにも美しい野菜にお目にかかることがありますが、そんなのとはぜんぜんちがう、なんか生き物といった感じの光です。なっているナスがこんなとは知らなかった。もぐ時ヘタのトゲが痛いのも。

が、こうやって夏の間やんなるほど食ってきたナスも、九月頃になるとあまりならなくなり。温度のせい、木の老化のせい、ぐんぐん太らないから、風や虫にやられたり、裂けたりしたのが多くなります。

こういうナスはもう堅くて浅漬けには向きません。小さいうちにとってきてカラシ漬けか丸ごと醤油味の炒め煮にします。ヘタというか萼もビラビラしたとこだけとってあとは

ついたまま一緒に煮るのです。ナスに包丁目を入れておきます。煮崩れるようなしなものじゃありませんから、油で炒め、タカノツメも入れ砂糖少々と醤油でしっかりした味をつけます。

こさは熱いうちもいいが、冷めてからのほうがなおおいしいです。ナスなのになんだかキノコのような香りがします。売っているナスにはない世界です。ヘタは実とまた、食った感じがちがっていいです。

あと、この堅いナスは山からとってきたクズレというきのこ（ナラタケ、非常にこわれやすいのでこう言うらしい）の汁には必ずいれなくてはならないものです。としよりは「（キノコの）ドッケシ（毒消し）だ」とかいますが、そんな非科学的よりうまいというのが理由でしょう。クズレから出るうまみと少しのぬらめき、秋ナスのかおり、これに茗荷でも入れれば、秋です。ミソ味しょうゆ味

いずれもいいです。

人生中年になればそんなに感激するようなこともない日々ですが、また一年がたったこと、一年生きてしまったこと、このままいけばまた来年になれば味わえるだろうこと、とそんなことを思わせます。べつに無理に思うわけじゃありません。舌から出た信号がアタマのほうにいつて、しぜんにそういう感想を滲みださせるといったあんばいなのです。



我田大（わがた・ひろし）
1947年新潟生まれ。東京都立
大学（社会人類学専攻）在学
中に、板前の修業をしたり、
雑誌「ガロ」周辺の人々と遊
んだりする。現在は六日町で
季節料理の店「大」を経営。
自家菜園では一般野菜からハ
ーブまで、幅広く栽培してい
る。
1994年、筑摩書房より、「野菜
がうまい」を上梓。注目を集
める。
「大」0257-72-4565

そして霜が降りると一夜にしてナスの葉は
しおれてしまいます。真夏の勢いのある草姿
は、まぼろしです。残っているのは白いナス
の枯れ木にしおれた葉ばかりです。元気でい
ればまた来年いろいろなナスを食べることが
できるでしょう。それまでさようなら。

（続）

十一月を迎え、各地からは鮮やかに色づいた紅葉の話題とともに、初雪の便りが多く届けられるようになりました。もうそんな季節なんですね。秋の深まりとともになぜか人恋しさもつるようになるものですが、皆さんはいかがでしょうか。

思えば、人は誰でも自分以外の人達との出会い、そして別れということの繰り返しの中で生きています。「袖振り合うも他生の縁」という諺がありますが自分がこの世に命を授けられ、生き、生かされていることも不思議なら、これまでの、そしてこれからもあるであろう多くの出会いもまた、本当に不思議なことです。しかしその逆に、せっかく出会った人達ともいつか

若和尚の

十九 其 し な い い っ ヨ チ

んらかの形でお別れをしなければいけません。また、その中には恨み心を持ってしまった人もいたでしょう。お釈迦様がお説きになった通り、まさに「怨憎会苦（おんぞうえくゝ 怨み憎むような人とも出会わなければいけない）」であり、「愛別離苦（あいべつりくゝ どんなに愛する者ともいつかは別れなければいけない）」です。

自分が愛しく思う人と別れるのも、その反対に好きになれない人と出会うのも、どちらも大変に辛いことです。でも、今一度考えてみましょう。それらたくさんのお会いと別れがあつたからこそ、今の自分があるとは言えませんか。その時には悲しさや辛さしか感じなかった親し

い友人との別れも、また、どうしても自分の性に合わないと思っていた人と一緒に過ごしたことも、気づかないうちに自分を成長させてくれた、大切な相手であり時間ではなかったでしょう。そんな風に振り返ること大切かと思えます。

人間は決して一人で生きていくわけではありません。直接間接にかかわらず、多くの人々と共に互いに助け合い、ささえあつて生きているのです。それを考えると自分を取り巻く人々の存在がいかに大きなものであるかを感じないわけにはいきません。たくさん、そして様々な人々との出会いと別れの中に、これからの自分が見えてくるかもしれません。

(正)

続

午後の日差しの中で

盲導犬と
子供たち

吉川英明



先月、この稿に三歳の男の子を救ったゴリラの話を書いた直後、今度は、人を救う犬の話を聞いた。

日本で最初に盲導犬を育て、その後も四十年余りにわたってその普及に尽くしている塩屋賢一氏の講演である。

塩谷氏は生まれつき犬が好きで、普通の犬の調練士として仕事をしているうち、外国には目の不自由な人を誘導する盲導犬というものがあることを知り、日本で第一号の盲導犬の育成に挑戦したのである。

戦後間もない昭和二十三年のことで、日本にはまだ盲導犬の存在を知る人ささもなく、その育て方もまったくの手探りの状態だったという。

そして、塩谷氏がチャンピーという最初の盲導犬を世に送り出したのが昭和三十二年、一念発起してから九年の歳月を要したことをみて、その困難が分かるうというものである。

その後、現在までに育てた盲導犬は六百八

十八頭に上るというが、四十年間に六百八十八というのは決して多い数字とは言えない。

つまり、それ程難しい仕事なのだ。

現在、盲導犬に使われるのは、シェパードとラブラドル・レトリバーの二種類なのだが、この中から盲導犬に適している仔犬を選びだすのがまず大変なのだそう。

塩谷氏の話を聞いていて、犬にも人間にそっくりな奴がいるというのがおかしかった。

盲導犬の条件としては、まず理解力、判断力、記憶力などが優れていること、つまり頭のいいことが必要なのだが、頭のいい犬のなかには、あまり仕事をしながらない犬がいるというのだ。そういう犬は、頭がいいだけにサボる要領もすぐに覚えてしまい、監督者の目が光っているうちは働くが、目を話すと適当に手を抜くのだという。

だから、塩谷氏が盲導犬として選ぶのは、多少能力的には見劣りがしても、まず陰日向のない犬だという。

何となく、耳の痛い話ではないか。

それに、塩谷氏が盲導犬の育成そのもの以上
に苦勞したのが、晴眼者の社会の犬に対する
偏見だった。

電車やバスに乗れないのはもちろん、レス
トランや旅館も犬と一緒に入れてくれない。
折角苦勞して育てた犬を送り出しても、こ
れでは白い杖を突いていた時の方が自由だっ
たという声が出てきて、塩谷氏を口惜しがら
せたという。

塩谷氏が運動を続けた結果、昭和五十二年
の道路交通法の改正で、やっと盲導犬が公式
に認められたというが、現実は今でもそう変
わっていないのではないかと、私は恐れる。
何しろ、現在日本で活動している盲導犬の
総数は、わずかに七百五十頭だというのだ。

盲導犬の存在こそ大分知られるようになって
きたが、これでは実際に見たことのある人
さえ限られてしまうだろう。犬は入れません
という場所は、まだまだ多いのではないかと
思う。

かくいう私も、実際に活動している盲導犬

を見たのはつい先日初めてだった。

ある音楽界で、私の横の席に盲導犬をつれ
た人が座ったのだ。

そこは東京都心の有名なホールだったが、
それでも入り口で、しばらくの間揉めたので
すと、その人の連れがこぼしていた。

この犬は、もう何度も音楽会に入っている
し、これまで一度として周囲に迷惑をかけた
ことがないのだと散々説得した揚げ句、やつ
と入れてくれたのだという。

私は、音楽会という特殊な雰囲気の中で、
犬がどんな態度で過ごすのかと、少なからず
興味を持って注意していたが、正直言って驚
いた。

席に着いた主人の足元に、ぴたっと伏せの
姿勢を取ったまま。演奏中はもちろん、曲が
終わって周りから大きな拍手が起ころとも微
動だにしない。

突拍子もない連想だが、昔の剣の達人や忍
者が、自分がそこにいる気配を消すことがで
きるという話を思い出した。その犬の場合が、

続・午後の日差しの中で



まさにそれだった。完全に気配を消している。周囲の我々にとっては、そこにいないのと同じなのだ。

その姿は、感動に値する。

私の周りには、盲導犬に気がついて、興味深げな視線を注いでいる人々が何人かいたが、演奏が終わるたびに、感嘆の囁きがさざ波のように伝わるのが私には分かった。

休憩時間になると、伝え聞いたのか、伏せている犬を覗きこみに来る人が後を絶たなかった。だが、人も犬も毅然として姿勢を崩さない。横で見えていて、嗜眠者の無作法をたしなめられているような気がしたものだ。

こんな躰のいい、礼儀作法を心得た動物を断る交通機関や宿泊施設があったら顔を見たい。人間の子供の方が、よほど行儀が悪いし、うるさくて不愉快だ。

この夏、友人達との小旅行で、海辺の旅館に一泊した時のことだ。

夕食を大広間に用意された指定の膳に座って食べたのだが、ちょうど夏休みに入っただ

かりで、子供連れの客が多かった。

悪い予感がしたのだがその通り、子供たちのうるさいこと、この上もない。

我々の近くにも四大家族ほどのグループが膳を囲んでいるのだが、その子供たち七、八人が、ひっきりなしにわめきながら客の膳の間を走りまわる。畳の上だから、すぐ脇を走られると埃っぽいし、ひどい時は膳が揺れる。親達とは見れば、子供たちの行動にはまったく無関心。自分達には関係ないといった風情で飲みかつ食っている。

何度目かに子供たちが私の横を走り抜けた時、ついに堪忍袋の緒が切れて、
「うるさいっ。部屋の中を走るんじゃないっ」

と一喝した。

子供二人が、びっくりしたような顔で立ち止まり、私の顔を凝視した。ここぞとばかり睨みつけると、こそこそと逃げて行き、二度と私達の横は走らなくなった。

ああいう場合、何故親が平気な顔ているの

か、本当に分らない。親が何も言わないから、ああいう子供たちが、そのままどうしようもない中学生になり、高校生になり大学生になって、公共心のない社会人に成長する。人間も犬と同じ、子供のころからきちんと躾なければ駄目である。

先ごろ、東久留米市の中学校で起きた体罰訴訟の裁判で有罪の判決があり、東京地裁の裁判長が

「体罰を容認する風潮があるのは憂うべきこと」と述べたことが大きく報道された。

確かに、学校教育法には「体罰を加えることは出来ない」と明記されているが、心ある親達の間には、場合によっては体罰もやむを得ないという意見が根強いのも事実である。

日本PTA全国協議会が先ごろまとめたアンケートによると、体罰を認める親が圧倒的に多いのだ。

アンケートに答えた三千七百人の保護者のうち、どんな場合でも体罰は許されない」と

いう回答は二五・六％に過ぎず、「場合によっては許される」が五十一・二パーセント、「反社会的行動に体罰は必要」が十七パーセントもあった。つまり、体罰を条件付で容認する親が全体の七十パーセント近くもいるのである。

東京地裁の裁判長の言葉は、このアンケート結果を意識してのものであったろうし、このアンケートを報道した読売新聞のコラムも、こうした親達の傾向に再考を望みたいと結んでいる。

だが、私はそうは思わない、場合によっては体罰は必要だと思う。体罰を全面的に禁じた学校教育法が悪法なのだ。

もう二十年以上昔のことだが、私が記者をしていた時、愛知県のある女子高の騒動取材の行ったことがあった。その時に見た光景に、私は雷に撃たれたような衝撃を受け、未だに忘れ得ない。

女子高校生が二人、校長の執務机の上にあぐらのような格好で座り込み、机に向かって

いる校長に指を突きつけて、お前呼ばわりで何か叫んでいるのである。

年配の校長の顔は怒りと屈辱で蒼白だったが、齒を食いしばって女子高生の詰問に答えている。周りの教員も手が出せない。

（日本の女子高生に、こんなのがいるようになったのか。学園で、こんなになっちゃったのか……）

まだ三十そこそだった私は、あまりのことに取材を忘れて茫然としてしまったのを覚えていてる。

そのころからもう、未成年者、いわゆる少年少女の犯罪は大人顔負けの悪質化を辿っていたが、学校でのあの態度を見れば、驚くにあたらないと思った。

高校生になつてからでは遅いのである。

幼稚園、小学校のころから、場合によつてのお仕置きは必要なのだ。

体罰は暴力だと反対論者は言うが、それは余りにも短絡に過ぎる。正当な体罰は暴力ではない。

東久留米市の例のほかにも、このところ体罰に対して有罪の判決が相次いでいるが、あまりこうした傾向が続くと、ちよつとしたことでも、裁判にしてやろうと訴える不見識な親が増えるのではないかとそれが心配だ。

あの海辺の旅館で、自分達の子供が走り回っているのを尻目に酒を酌み交わしていた親など、恐らくそんな手合いだろう。

塩谷氏は講演の締めくくりで、冗談交じりに、

「盲導犬と同じように躰たら、子供は立派に育ちますよ。よろしかったら、お電話下さい」と行つて会場を笑わせたが、その通りだと思ふ。日本で、犬に負けないような子供たちが育つて欲しい。

（了）

薫香 線香 經典 念珠

浄土宗総本山知恩院御用達
豊田愛山堂老舗

※地方発送受賜ります。

京都・祇園
TEL(075)551-2221(番代)
FAX(075)525-1806番

「だれにも迷惑かけてないからいいじゃない」最近、女高生たちの売春が世をさわがせている。そして、彼女たちが警察に捕まってしまう、言いぐさがこれだ。「その言葉、冗談でしょ。ふざけんじゃない」と言いたい、彼女らは本気でそう思っているらしい。それこそ、このバカたれがである。一体、彼女らは何をどう考えているのか。いやいや、彼女らだけではない。彼女らを買う大人たち。一体、彼らは何を考えているのか。彼

らこそもつともつと責められるべきだ。こうしたことの原因を、新聞や週刊誌、テレビなどがいろいろと言っているが、どれもこれも一理ありそうで、その実真理からはなれているように見えてならない。もつと根本から考えてみるといい。それは、子どもが生まれた両親が、子どもにどういう人になってほしいか、というアンケート調査で、いつも一番になっているのが、「人に迷惑をかけない人になってほしい」という願いだ。

④ しろに減加いい

「人に迷惑をかけない人に……」、これは、たしかに正しいことのようにみえるが、よく考えてみれば、彼女らの言うように、迷惑をかけなければ何をしてもいい、ということにつながってきほしないか。ここに問題がある。

人に迷惑をかける、かけないを教える前に、ことの善悪、人間としての誇りを教え、考えさせることをしなければいけない。いまの日本に欠けているのはこの教育だ。

(順)

『円龍寺だより』より

一分間で得られる智慧

群馬・服部順空

「表裏一体」

結婚生活が難局にさしかかっていたので、

男は禅師に助言を求めに出かけた。

禅師は言った。

「奥さんの話すことに

耳を傾ける術（すべ）を学ばねばならぬ。」

男はこの助言をまともに受け止め努力した。

ひと月の後戻って来ると、自分は妻のことばにひとつひとつ

つ耳を傾ける術を学んだと報告した。しかし男の顔色はま

だ冴えない。

禅師はニヤリと笑って、言った。

「さあ、今度は家に戻って、

奥さんが声に出さないことばに

ことごとく耳を傾けなさい」

「持ち主は誰？」

ある女が悩みを打ち明けて言った。

「私は隣人のねたみや陰口に悩まされています。

どうすればいいのでしょうか」

ある男が悩みを打ち明けて言った。

「私は目上の者の皮肉や嫌味に耐えられません。

どうすればいいのでしょうか」

釈尊は二人にこう尋ねた。

「もし誰かが贈り物を買ってある家に出かけたが
その家の主人がそれを受け取らなかったとしたら

その贈り物は誰の物か？」

二人は口を揃えて答えた。

「それはもちろん買った人の物でしょう」

すると釈尊は澄んだ落ちついた声でこう言った。

「それでは悪しき言葉・貧しき心の贈り物は受け取らず

すべてその人にお返ししなさい。」

『そう見えてもそうじゃないこともある』

新たに弟子入りした熱血漢の小僧が老師に言った。

「この世は不公平ですね。正直者が馬鹿をみたり、誠実な

人は大変な思いをする。かと思えば金持ちのボンボン

苦勞もせず気ままに暮らして、政治家の二代目はそのまん

ま議員さんになる。おかしいと思いませんか？」

老師はそれに答えてこんなたとえ話をした。

「満員電車で若者が座って居眠りをしていった。そこへ途

中の駅から仕事を終えた中年の男が乗り込んで来たんじやが、当然席はない。男は楽そうに座つて居る若者を見て、心の中で「毒づくんじや……」ついでに「奴だな、若いくせに、楽しやがつて。こっちは一日中働いて死ぬほど疲れてるのによ」

だけれどその若者は、席に座る為に電車を一本やり過ぎし、始発駅の寒いホームで三十分も立って並んでいたんじやがのう……

世の中にはそう見えてもそうじゃないことが沢山あるぞ。目の前にある状況だけに目を奪われると、認識を誤つてしまうようになる」

必死になつて今の話を整理しようとする小僧に対し、老師は更に続けた。

「それでな、その若者も中年の男も目的地は終点の駅までだったんじや。確かに立つてるより座つた方が楽だけれども、目的地に着くまでかかった時間は、若者よりも中年の男の方がずっと短かつたんじやよ。」

「見えるもの・聞こえるもの」

自らを聖者と名乗る男が

この世は邪悪なもので満ちあふれ

やがて世界に終末が来るであろうと予言していた。

修行して来た超能力によって

自分には、そうした風景が見え

そういう神からのお告げが聞こえるというのだ。それを聞いて不安に思つた人が菩提寺を訪れ

信頼している住職に尋ねた。

「あれは本当なのでしょうか？」

住職はその人を庭に案内し

おもむろに手をバンバンと叩いた。すると……

池の鯉は餌をくれるものと騒ぎだし

木に止まっていた鳥は驚いて飛び立ち

弟子の一人は「お呼びでしょうか？」とやがて来た。

住職はニコリとしその人に告げた。

「同じひとつの音に対しても

それを聞くものによつてこれだけ反応が違います。

私たちは自分の心というフィルターを通して

この世界を見たり聞いたりしているのです。

その聖者と称する方にこの世界がどう映るのかも

そしてその予言をあなたがどう受け止めるのかも

すべてはただその人の心次第なのです」

「一切唯心造」

腕自慢の武芸者が高名な老師と同席し、

ひとつ試してやろうという気持ちをおこした。

「坊さんよ、地獄や極楽なんて本当に有るのかい？」

もし有るのなら見せてみてくれ。」
からかうようにそんなことを言った。

老師は武芸者に向かいフンと鼻をならし
さも輕蔑したようにこう言った。

「そんなことも分からぬようじゃ、お前さんも
ろくな侍じゃなさそうじゃのう……」

「無礼者っ！ 覚悟しろっ！」

逆上した武芸者は、思わず刀を振り上げ
老師に切りかかろうとした。

その時老師は少しも慌てず顎をしゃくり言った。

「そこが地獄じゃ……」

ハッ和我に帰った武芸者は、自らの行為を恥じ
老師に手をついて詫び、改めて教えを乞うた。
その背中に向かって老師は静かに声をかけた。

「そこが極楽……」

「施す人・施される人」

一休和尚が寒風吹きすさぶ町を歩いていて。
その日はあまりに寒かったので。

普段の法衣の上に外套をはおってはいいたが、
それでも吹く風は正に身を切るように冷たかった。

通りの向こうから、薄い着物を一枚だけ着た
いかにもみすばらしい身なりの老人が
寒そうにふるえながら歩いて来た。

一休和尚はその老人を哀れに思い
自分の着ていた外套を脱ぎその老人に差し出した。
老人はただ黙ってその外套を受取ると、
また黙ってすたすたと歩き始めた。

呆氣にとられた一休和尚は、
その老人を呼び止めて尋ねた。

「お前さん、それを貰って嬉しくないのか？」
すると老人は振り返り、

「お前さん、これを贈って嬉しくないのか？」
そう言う、また変わらぬ足取りで去って行つた。

「次ぎなる行い」

その男は怠（せ）いていた。

一日でも早く《真理》を得たいと……

自分も賢者の仲間入りをしたいと……

道を求め様々な賢者の元を渡り歩いた。

今日もまた男はある賢者の前に額づき告げた。

「私は日々聖なる書物に目を通し

賢者の声に耳を傾け

その教えに忠実に生きております。」

自分がその為にかくに真剣であるかを述べた。

「しかし未だ《真理》を見つける事ができません。どうか私が《真理》に至る道をお教え下さい。」

賢者はしばらく、じいっとその男を観察した後極めてノンビリした口調で告げた。

「じゃあとおりあえず、あなたの部屋の押し入れを掃除してらっしゃい。」

「そこにいる」

その昔

創造と奇跡を司る神と

慈悲と悟りを司る仏は

実際に肉体を持ち

人々と共に暮らしていた。

人々ははじめ

自分ではどうしようもできない

そんな問題が起きた時にだけ

神や仏に救いを求めた。

しかし時がたつにつれてだんだんと

人々は自分で解決するという事を忘れ

ちよつとしたこと何でもかんでも

神に求め仏にすがるようになつてしまつた。

神と仏はこれではいけないと考え

ひとまずどこかへ隠れることにした。

あれこれ相談をした結果、人間に聞かれないよう

ひそひそ声でこつ言つた。

「よし、うんと小さくなつて

人の心の中に隠れよう……」

「自由の意味」

老師は一週間に一度、各地の弟子を訪れ

その者の修行の進み具合を見ることが常であつた。

今日も一人の弟子の元を訪れ、

宿題としてあつた經典の解釈について質問した。

「さて弟子よ、あの經典はどうであつたか？」

「申し訳ありません。先週は来客が多く、忙しくて

とても目を通す時間がありませんでした」

その返事に老師はフムとうなずき言つた。

「そりや大変だったのう。ではまた来週来るでしょう」

翌週 老師は同じ質問をした。

「相すみません。隣の家の建て変えが始まりうるさくて何も手がつかないのです。」

老師はまたフムとうなずき

「そりや災難じやのう。ではまた来週」

しかし、次の週も弟子は經典を読むことができなかった。

「母の体の具合が悪くなり、心配で集中出来ません」

「そうか、それはお気の毒なことじゃ。どうぞお大事に。」

では帰るとしようか。……どこで

老師は帰り際クルリと振り向くとこんなことを訊ねた。

「お前は外出をする時に

自分で自分の靴を履いて好きに歩くのと、

行く先々の全ての道を誰かに絨繒を敷き詰めて貰うのと、

どっちがいいと思う？」

「見るべきもの」

熱心に修行生活をおくる若い仏弟子がいた。

これまでは一心にひとつの仏に帰依してきたのだが

今彼の心の中では

別の仏に対する新たな信仰が芽ばえつつあった。

彼のそんな様子は兄弟子の目にも止まり

先輩はその若い弟子に詰問した。

「お前の信仰はそんなにいい加減なものだったのか」
しかしその若者は自分を全く恥ぢる所はなかった。

彼らの師僧はそんな弟子達の様子を観察し

翌日の法話の席でこんな話を用いて説法された。

昔一人の若者が旅に出かけた。

その旅は大きい川や高い山を越えて行く

非常に険しい旅であった。

若者は目の前に横たわる大河を

イカダに乗り何とか渡り切った。

陸に上がると次に待っていたのは険しい山であった。

若者はためらわずイカダをそこに置き

やがて山を乗り越え目的地に着くことができた。

弟子たちよ

川を渡る時役に立ったイカダも

山に登るには足かせとなることもある。

目的地に着くにはその時々によって適した方法があり
そして大切なのは表面に現れた行動に惑わされることなく
その行いの内面にあるものを正しく見るといふことだ。

「閻魔様の正体」

悪人でも偉人でもない

一人の男が今静かに息を引き取った。

家族は男の回りで嘆き悲しんでいたが

本人には痛みも苦しみもなく

いやむしろ生前に感じたことのない程

穏やかで平和な状態の自分にとまどっていた。

男はしばらくの間

さてこれから先どうしたものかと考えていたが

やがてそこへガイドがやって来て

いわゆる冥土の旅へと男を導いて言った。

男はガイドについて歩きながら

自らの人生の一コマ一コマを

子供のように素直な心で思い出していた。

あるお宮の前に着くとガイドは男にこう告げた。

「さあ、私の役目はここまで。

後はお宮の中の閻魔様とあなたと

一対一で人生をふり返り

この先の行き場所を決めて下さい」

一体閻魔様の裁きとはどんなものなのか
男は勇気をふるってバツと扉を開けてみると

正面に淨らかに磨きあげられた鏡がただ一枚。

そこにはありのままの自分の姿が映っていた。

『私も持つてる』

様々な修行を重ね、心と体の両方を調える法を熟知して
いるそのヨガの聖者の元には、教えを求めて、毎日多くの
人々が訪れている。

今日も一人の男が聖者に訴えている。

「まったく家の女房ときたら、なまけ者でだらしくなくて文
句言うどふてくされるし、全然思いやりもないしで、一緒
にいるのが嫌になつてきます」

それを聞いた聖者は言った。

「そりやみんな、お前さんが持つてるもんじゃろ？」

「いいえ、どんなでもない、私は働き者できれいい好き。人には
優しいし、女房とはまったく正反対です。私がそんな嫌
なものを持つてるなんてあり得ません」

「そうか。それではお前さんの心によく効く薬を教えよう。
自分ですぐ作れるから、これから言う通りやってみな
さい」

聖者はその作り方を説明し始めた。

「ではまず目をつむり、三十秒間つばをためて、そして、それを飲みなさい」男は言われる通りにして、ゴクンとつばを飲み込んだ。

「次は目を明けて、また三十秒間つばをためなさい。」

男は指示に従いまたつばをためた。

「そして今度は、溜めたつばをこのコップに出して、それをよく見て、さっきと同じように飲みなさい……」

しかし男は、今度はそれを飲むことはできなかった。

「説明はいいだろうが、最初のつばも二回目のつばも、同じお前さんのつばじゃ。」

どうも人間というのは、自分の内側にある時には、そこにあつても目には見えず何とも感じないが、自分の外側に出了途端、それがはつきりと見えて、何とも汚らしく感じるものなのじゃの。

『自然現象』

日照りの続く夏の終わりの午後

一人の女性が菩提寺の和尚の元を訊ねた。

「私は先月愛する家族を失いました。

あれから毎日泣いて暮らしています。

回りのみんなはそんなに悲しむなとか

もう泣くなと言ひ

自分でもそうしなきゃと思うのですが

やつぱり一緒に過ごした日々を思い出すと

涙がこぼれてしまいます。

私はどうしたらいいのでしょうか？」

和尚はゆっくりと時間をかけて話を聞いた後

ちよつと照れくさそうにこんなことを言った。

「あのう、ごはんを食べたらトイレに行きますよね。

そしてトイレから出る時は水を流しますよね」

女性は一体この人は何を言い出すのだと思ひながらも

勿論その通りだと答えた。

和尚は言う。

「今のあなたにそんなに悲しむなということはお前はトイレに行かず我慢をしろと言うことであり

もう涙を流さずとそのまま出てこい

トイレで水を流さずとそのまま出てこい

言つてゐるようなものだと思います」

「それじゃ私は泣いてもいいつてことですか？」

女性が変わつたように頬をゆるめながら訊ねたその時

突然窓の外を稲光が走つた。

二人がハツとして窓の外を見ると

乾き切つた大地を潤すように

久しぶりの夕立が音を立てて降り始めた。

俳句の「俳」

大畑 等

床の間に近く座れば萩見え

鈴木 清

床の間の近くは上座であり貴人の席である。しかしそこは序列を演出する要であって、そこに座った本人にとって心地よいかどうかは、これまた別である。生活のなかでの、儀礼的なものは時には面倒なもので、部屋に入っただけの下座からはあんなに萩がよく見えたのに、ここではさっぱり見えない。心は萩にあつて、尻が落ちつかない作者の心情が伝わってきて、思わずニヤリとしてしまう。一茶の句に「づぶ濡れの大名を見る炬燵哉」があつて、大名行列をからかっているのであるが、この「床の間」の句は床の間と作者自身をからかっているだけに、「軽み」さえも感じられる。

姑の煮し唐辛子なり辛すぎる

鈴木 清

句の意味は解りすぎるほど解る。それでい

て思わず笑ってしまうのは、下五の「辛すぎる」が、後うちのリズムで合いの手のように表現されているからであろう。「姑」も「唐辛子」も句がもたらす笑いによって、日常の袋小路から救い出され、言葉そのものに余裕すら感じてしまう。「床の間」の句にしても同じであるが、こういうゆったりとした句の調子で日常を詠うのには、技法とともに「生」を肯定する深さがあったことで、私などはただただ羨望しつつ、楽しませてもらっている。

「俳句」、「俳諧」の「俳」はそむく、おどける、戯れるなどの意味があるようだ。日本書紀の「天の岩屋戸」に「俳優」という字がでてきて「わざおぎ」と読ませている。「胸乳を掛き出て、裳緒を陰に押し垂れ」て踊り、神々の笑いを誘うアメノウズメノ命は「俳優」なのだ。「天の岩屋戸」は古代の祭式のなかで演じられた「劇」と考えられるが、笑いはやはり人間にとって根源的なものであることを証

している。

俳句の笑いは、腹を抱えて笑うような態のものではないが、日常の行為や感情の安定した領域をきつちりと崩していく。「戯れて」崩していく。短詩型であることの強み、つまり前の言葉の意味（例えば姑）の生々しさが現前しているうちに、「辛すぎる」と戯れることによって崩されるのである。わたしたちはそこに、ものごとの裏面がふつと見えてしまう解放感を感じると言ってもいいであろう。日常が解放されるのだ。

水虫に妙薬墓が林立し 池 禎章

文法に添っているので、読むことはできるが、解釈を拒否しているかのような句である。「水虫に妙薬」と「墓が林立し」との間にいかなる関係があるのだろうか。以前の私の解釈を紹介すると

「生」が「水虫に妙薬」という「もの」によつて表される。まるで凸レンズの焦点に絞り込まれるかのように。ここらへんは俳句表現の骨頂であろう。そして目の前に「死」の象徴としての墓がただっ広く林立している。

「生」と「死」がまるでうちわの表、裏に描いた絵のように、紙一枚を挟んで並存しているのだ。

この作家の自在さにはいつも驚かされるのだが、ひよつとすると日本語の文法にまで「戯れ」ているのかという思いにいたる。ちよつと句を補足しつつ分解してみると、

水虫に妙薬（在り）

墓が林立し

述部の（在り）が「墓が林立し」とイコールなのだ。しかもその（在り）は句中では消



えている。述部が全く別のものにとって代わられていて、その代わられたものと主部が通底していく。融通無礙の世界を思わせるのだが、意識的にできるものではないし、こういうふうには即物的にその世界を詠うことができないのは、やはり俳句ならではのことであろう。いやいや、分解などして解釈するのは、ちよつと常識に墮するのかもしれない。二つのことの並存をそのまま受けとって、多重な世界の響きをただ楽しむべきなのかもしれない。夢の世界がそうであるように。

とにかくこの二人の俳句作家の本気な「戯れ」には興味深々、いつも解放感を味わさせていただいている。ついでにもう一句、

とめどなく喋る病歴蛭がグウ 池 楨章

思いあたる人はいませんか？

快適な環境を創造する

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長 梅田 貞夫

本社 ● 東京都港区元赤坂1丁目2番7号
電話 ● 東京03(3404)3311(代)

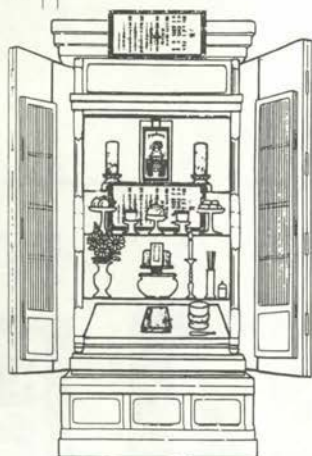
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

墓地研に アドバイス



中西泰代

(長野)

最近出版された京大名誉教授森穀さんの本「**「**電腦は自由をめざす**」**の中に次のような一節がありました。

『大学にいたころ、学生と話していて、「墓地研」というサークルのアイデアを考えたことがある。東京や大阪でもいいかもしれぬが、京都はとくに町なかに寺が多い。寺の名はそれほど有名でなくとも、その墓地に歴史的人物の墓があったりする。

そこで月に一度、「今月の墓地」という発表をする。カメラとイラストとライターと三人のチームで、写真にイラスト・マップに墓の人物の紹介。数ページ分ぐらいの作品を毎月発表する。

大学に四年間いると、一冊の本になる。これが出版社だと、企画に四年もかけるのはつらいが、学生だと四年間でゆつたりと。そして、「京都墓地マップ」ともいった本を出版して、その印税で盛大にお別れパーティーを開いて解散。四年間に限定するこ

とて、先輩だの伝統だのを気にしなくてすむ。大学生活も四年間の旅と考えれば、一種の観光レポートと言えなくもない。ついでに、カメラやイラストや文章の腕をみがけば、卒業してからフリーの業界で稼げるかもしれない。作った本を宣伝材料にしながら……」

ウーン、「墓地研」なんてもうどこかの大学にあるんじゃないかしら。墓地研をやってみたいという学生さんにお知らせしたいことは、お寺には参詣人は一人でも多い方がうれしいという素直なお寺と、墓地研のようにお金にならないお客さんは余りありがたいというお寺と二通りあるということです。(うちの住職などは後者である——ここだけの話)

そこで「対寺院心得五ヶ条」というのを伝授しましょう。

其の一 予約の電話はお寺を拘束することになるのではない。

其の二 礼儀を考え、タオルを台に志納の千

円位添えて庫裏にあいさつする。留守の場合はタオルに置手紙をしておくとか後々の便宜になる。

其の三 本を出版する予定があると明言する。お寺のPRになるとか、まちがったことを書かれては困ると思います、多分親切に対応してくれる。

其の四 一応は「お墓参り」なので線香を持参し上げる。防火のため、後でよく消しておく。花や供物は状況にもよるが上げない方が無難である。

其の五 他の墓地にむやみに入ったり、周囲を荒らしたりしないこと。

以上、最大公約数的に、大方のお寺に当てはまるでしょう。それでは学生の皆さん、墓地研で楽しく有意義な四年間を過ごして下さい。ちなみに当山には、有名人のお墓というのはないようです。

誌上俳壇

格子戸の土間に秋日の四角かな

飼猫を呼ぶ声大秋の暮

巡礼の鈴はるかより花野道

鰐口のこもりし音や柿の秋

松本厚子
(東京都町田市)

内堀綾子
(東京都小平市)

葬列の長き徑なり緋衣草

菊酒に足をとられて紅鼻緒

母の齡とうに越えけり秋彼岸

過ぎし日は戻ることなしいわし雲

渋柿を童吐き出す塀の下

寝待月雲の下より愁いなし

佐藤雅子（山形県上山市）

佐藤みつ江（群馬県高崎市）

蓮門俳子（月天）

本堂の裏に真紅のななかまど

唐橋に武人もののふの夢酔芙蓉

ひぐらしやきんつばを買う老紳士

逢わないでいようとしても葡萄う熟る

蓮門俳子（月天）

蓮門俳子（月天）

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京2176372

事務局便り

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先的要領でどんどん応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
2 俳句・短歌・川柳など…一首まで
3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など…適宜、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 十一月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他、ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

新規会員紹介（敬称略順不同）

購読会員

伊勢 鈴鹿組 南龍寺

横浜 中区 山田徳康

東京 足立区 福原正人

新潟 高田組 善導寺

茨城 霞北組 浄国寺

東京 新宿区 黒田由夫



念仏が楽しく聞こえる十夜哉

岱潤

私の寺では十夜法要のとき、百万遍大数珠回し、礼拝、木魚による念仏と、三通りの念仏を、参加者全員で体験しお称えする。ご法事のときのしみりとしたお念仏とは異なり、時々笑い声も聞こえる楽しいお念仏で、先導している私自身も嬉しくなってくる。報恩感謝の法要である十夜法要ならでことだと思ふ。

「お念仏をしていてもちつとも楽しくない、足が痛いことしか考えられません。」と、学生から詰め寄られたことがある。そんなときは、親鸞聖人よろしく、「私もそうなんだ」と答えることにしている。確かに強制されてお念仏していても、楽しいわけではない。でも、自分が先導してお念仏していると、自然に楽しくなってくるから不思議だ。これはどんなことでも、いえることだろうけれども、お念仏は特に強く感じられる。

今月号ご執筆頂いた尾崎安雄先生は、在家から寺に入られ、高校の教師を長くされていた方で、近年『古寺名刹への道』三巻の著書が続けて発行されていらつしやる。一巻は、法然上人二十五霊場ほか法然上人の旧跡を訪ねられ、二巻では善導大師・玄奘三蔵のお墓とその旧跡、北魏石窟寺などを回られ、三巻では、ブツダへの道としてインド石窟寺などを訪ねられ、詳しく解説されておられる。いずれも単なる旅行記ではなく、師の信仰に裏打ちされた教化のための本となっている。わが宗門にもまだまだ隠れた逸材の方がいらつしやることを教えてくれた。このような先生をお知りの方は是非編集部まで、お教え下さい。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

太田正孝

石上俊教

オフィス・頼加代表 佐山哲郎

編集協力

編集顧問

大室了皓

浄土

六十二巻十一月号 価額六百元
年間費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成八年十月二十五日
発行——平成八年十一月一日

発行人兼編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シータイイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七十四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できた。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上り。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い魅びが待っています。シーマ/シーマ/あなたの熱い賞賛の声が聴こえそうです。日本車初、全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1L V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかに力強い加速を生みます。



Photo: シーマ 41LV ガディネーター・ダークブルー・メッシュブラック・アコースティック (※4S9・特別塗装色) 本車種はメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ネット値) ●最大トルク36.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートリクライニングシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレックスカーライフ各販売店へ。

スピードおさええて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 NISSAN

人間のやさしさをクルマに。



夏だ。冬だ。 ノドは

冬だ。寒くても、雪にまみれて、雪原はアツイ
アツイから、泡ている
スホーの汗、火の熱、恋の汗、
冬が来ても、夏みたいにカラッカラの僕のノドに、冬物語
スカッとした爽快な味が、雪のようにノドをすべる
カラダが、シシとうるおつていく
冬だけの生ビールサッポロ 冬物語。今年も運命の冬物語
さあ今年は、誰とどんな物語？



★PPORO 冬物語

THE WINTER'S TALE

サッポロビール株式会社

ビールは、20歳になってから、あきかんはりサイクルへ。

※協力のお願：自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています

